

Kansai Nnikikai Opera

Jan.2023



関西二期会第95回オペラ公演「リゴレット」(2022年11月)
撮影:早川壽雄



Contents

- 2.3 『魔笛』 作品解説
- 4.5 指揮者・演出家が語る『魔笛』
- 6.7 振り返る 人生の軌跡
- 8.9 コンサートレビュー
第95回オペラ公演『リゴレット』
第31回イタリア歌曲の流れ イタリアの風景 Vol.5 ～躍動～
- 10 谷やんの企画・制作デイリーライフ
- 11 賛助会 入会へのお誘い
- 12 受賞のお知らせ / 新入会員の紹介 / コンサートスケジュール



公益社団法人
関西二期会

歌劇

魔笛

「音楽の力」と「人間愛」が浮かび上がる モーツァルト最後のオペラ

《魔笛》(1791年初演)はモーツァルトの最後のオペラであり、彼のオペラの集大成であると同時に、時代を超えて愛されるオペラである。

《魔笛》は、人気オペラの定石から外れたオペラでもある。《椿姫》や《カルメン》のような人気オペラの大抵は、音楽もポピュラーなら話も分かりやすく、感情移入しやすい。だが《魔笛》はヒットメロディこそ多いものの、物語に関しては「よくわからない」という声が多いのも事実だ。善玉と悪玉が途中で入れ替わったり、訳のわからない「試練」が出てきたりと、首をかしげたいところが多いのである。それにもかかわらず愛されるのは、モーツァルトの音楽の魅力ゆえだろう。

《魔笛》は、ドイツ語による「ジングシュピール(=歌芝居)」という形式で書かれている。モーツァルトの大半のオペラはイタリア語だが、それは宮廷からの依頼であり、宮廷オペラは基本的にイタリア語で作曲されたからだ。一方《魔笛》は、モーツァルトのオペラで初めて一般庶民のための劇場から依頼され、庶民の言葉であるドイツ語で書かれた。ちなみにモーツァルトは本作を、「2幕の大オペラ」としている。庶民的なジングシュピールとは違うものを作ったという自負があったのではないだろうか。

音楽の万華鏡

確かに《魔笛》の音楽は、民衆劇であるジングシュピールとしては桁外れに多彩で豊かだ。モーツァルトは《魔笛》に、それまで彼がオペラで開拓してきたあらゆる音楽を注ぎ込んだ。伝統的な宮廷オペラに必須だった超絶技巧のアリアもあるし(夜の女王のアリア)、喜劇オペラの要だったアンサンブルは二重唱から五重唱までバラエティ豊か。庶民的な民謡ふうの歌も多様だ(パ

ゲゲーノやザラストロのアリア)。《魔笛》は、モーツァルトの音楽の万華鏡と言ってもいい。



関西二期会 第79回オペラ公演『魔笛』(2013年1月)

お伽噺とフリーメイソン

題材から見ると、《魔笛》には二つの側面がある。お伽話&魔法オペラ、そしてフリーメイソンのオペラという側面だ。辻褄の合わない物語は、この出自からきている。

お伽話オペラになった理由は、《魔笛》が庶民の劇場のために書かれたからだ。《魔笛》は、エマヌエル・シカネーダーという俳優兼劇作家が支配人を務めていた「アウフ・デア・ヴィーデン劇場」からの依頼で作曲されたが、この劇場は、市壁の外にある商業施設の中に造られた庶民のための劇場だった。この手の劇場では、機械仕掛け(《魔笛》では例えば冒頭の蛇や、三人の童子が乗る雲など)を多用したお伽話系のジングシュピールが大流行していた。

一方、《魔笛》が「フリーメイソンのオペラ」であることは、第2幕でタミーノとパパゲーノが受ける「試練」が、フリーメイソンの入信式をなぞっていること、フリーメイソンの数である「3」が随所に見られること(三人の侍女、三人の童子など)をはじめ、幾つも挙げられる。何より、

夜の女王が支配する闇の世界が、ザラストロが導く光の世界に打ち砕かれることこそ、フリーメイソンが信奉していた啓蒙主義の体現だった。善玉のように登場する「夜の女王」は、名前を見れば最初から悪玉なのである。

身分を越えた 人間讃歌

「フリーメイソン結社」は、理性的な個人を創り、社交や慈善を通じて人類や社会の理想を追求することを目的に1717年にロンドンで結成された社交団体である。時代はそれまでの身分制度が崩れてフランス革命へと至る過渡期にあり、カトリック教会や君主制に代表される旧体制に限界を感じていた人々はフリーメイソンを熱烈に支持した。モーツァルトも、フリーメイソンの熱心な会員だった。

だが《魔笛》が初演された頃、フリーメイソンは危機の時代を迎えていた。背景にあったのはフランス革命である。革命のきっかけとなったバスチーユ監獄の襲撃は、《魔笛》初演の2年前に起こっている。

革命はオーストリアのハプスブルク家に大きな衝撃を与えた。フリーメイソンは革命の原動力ともなった啓蒙主義を支持していたため、弾圧される。そんな中で、モーツァルトはメーソンの思想が刻印された《魔笛》を作曲した。ザラストロ一派の「光(=太陽)の世界」の勝利は、フランス革命後の新しい世界、来たるべき市民社会の勝利である。「王子」のタミーノは無事試練を終え、パミーナとともに光の世界に迎えられる。そして彼らは、身分を超えて「人間」であること、「人間」そのものを讃える。

この「光の世界」に足を踏み入れられない人々もいる。「闇の世界」の支配者である夜の女王一派はもちろん、人間の本能に忠実で、「試練」から脱落しながらも理想の女性を探し求める自然児パパゲーノ(と、彼のパートナーになるパパゲーナ)もそうだ。だがモーツァルトはそんな彼らにも、素晴らしい、そしてなにより共感に満ちた音楽をつけた。「闇の世界」に属する夜の女王のアリアは、オペラの歴史に燦然と輝く名曲だ。モーツァルトはあらゆる身分の人間に、音楽を通じて温かなまなざしを注ぐ。

このようなモーツァルトの音楽の魅力は、フリーメイ



関西二期会 第79回オペラ公演『魔笛』(2013年1月)

ソンやお伽話オペラに関する知識がなくても享受できる。クリスチャンでなくとも、バッハやモーツァルトの宗教音楽に心動かされるように。それこそが《魔笛》の素晴らしさの源泉であり、時代や国境を超えて多くのひとをとらえて離さない由縁なのだ。その根源にあるのは、劇中で「魔笛」が象徴する「音楽の力」への信頼であり、人類愛と言ってもいいほど懐の深い、モーツァルトの人間愛なのではないだろうか。

(文・加藤浩子)

(写真・早川壽雄)

公演情報

第96回オペラ公演『魔笛』

<全2幕 原語歌唱・日本語台詞・字幕付>

指揮：Ken Yanagisawa / 柳澤 謙

演出：高岸 未朝

管弦楽：日本センチュリー交響楽団

公演日程：2023年2月25日(土) 16:00 開演

2023年2月26日(日) 14:00 開演

公演会場：兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール

2月25日(土)	役名	2月26日(日)
片桐 直樹	ザラストロ	武久 竜也
米田 哲二	弁者	西尾 岳史
秋本 靖仁	タミーノ	角地 正直
金岡 伶奈	パミーナ	奥田 敏子
萩原 寛明	パパゲーノ	小玉 晃
密山 宏美	パパゲーナ	三村 浩美
四方 典子	夜の女王	松浦 優
泉 貴子	侍女I	白石 優子
田中 智子	侍女II	西村 薫
大垣 加代子	侍女III	井上 美和
藤田 大輔	モノスタトス	八百川 敏幸
山本 伸子	童子I	井上 結衣
丸山 紗佳	童子II	矢代 あすみ
味岡 真紀子	童子III	安井 裕子
西垣 俊朗	武士I	馬場 清孝
服部 英生	武士II	萩原 泰介
西口 佳宏	僧侶I	西口 佳宏
山咲 響	僧侶II	畠田 優介

◆本公演のチケットは、好評につき完売致しました。

指揮者・演出家が語る『魔笛』

気鋭の指揮者、柳澤謙さんと、第94回オペラ公演『ドン・ジョヴァンニ』で好評を博した演出家の高岸未朝さんが初めてタッグを組む。二者がモーツァルトの傑作オペラをどのように”調理”するのか。意気込みを伺った。

(インタビュー：四柳育子)

指揮者 Ken Yanagisawa (柳澤 謙)

ボストン市民交響楽団で副指揮者を務める傍ら、ボストン大学芸術学部でオーケストラ指揮の音楽芸術博士課程に全額奨学金生として在籍する、柳澤謙さん。アメリカに活動の拠点を置きながら、世界的に活動する若き指揮者が、モーツァルトの傑作オペラ『魔笛』に挑む。

指揮者を目指したのはいつでしょうか

アメリカで生まれ育ち、幼少期よりピアノ、14歳でオーボエを始めました。ジュリアード音楽院のプレカレッジ生の時に、音楽院で教鞭をとる教授の指揮の授業を受けたのですが、それがとても楽しかった。その後、イエール大学で学び、本格的に指揮を学び始めたのはマンハッタン音楽院の修士課程に入ってからです。

コロナ禍の中、欧米の音楽関係団体が音楽家の受け入れを制限していた時期は、もう一つの母国、日本の京都市立芸術大学の研究生として下野竜也先生にご指導頂きました。先生に付いて広島交響楽団の活動を間近で見られたことは、私の中で大きな経験となりました。

オペラが持つ魅力とは何でしょうか

ワーグナーが「Gesamtkunstwerk」と言ったように、私もオペラは「総合芸術」だと思います。オーケストラの演奏に歌や芝居といった動きが付く。オーケストラ指揮にも魅力がありますが、でも私の場合はそれだけでは物足りない。自身がメインではなく、オペラという大きな芸術の中に身を置き、一員として作用し、もっと大きなものを創りたいという考えが常にあります。

オーケストラ、観客、作曲家の世界など、時間を超え、広く大きく繋がれることにオペラの魅力があるのでしょう。

指揮者として、オペラ「魔笛」はどのような作品ですか

モーツァルトの最後のオペラとだけあって、非常に精巧に、そして思慮深く創られています。オペラにフリーメーソンの思想が入っていることはよく語られますが、でもそれだけではありません。スコアを読み込むと、登場人物の様々な関係が見えてきます。例えば、「夜の女王」と



「パミーナ」が親子であるという事が、物語の設定だけでなく、音符の繋がりからも読み解くことが出来ます。同じメロディーを長調、短調で用いる、同じ旋律を繰り返すなど、モーツァルトは聴衆の耳に残る音楽を巧みに創り出しています。

このオペラは現在より230年以上前に創られていますので、歌詞の中に人種差別的な表現が含まれていません。演出の高岸さんと相談し、上演の際はそのような要素を無くす方向で考えています。昔のオペラを現代社会の中で、どのように変化させるか、それも指揮者の仕事でしょう。

日本で初めてオペラの指揮をされます。お客様に一言、お願いします

関西二期会で『魔笛』を振ることが、とても楽しみです。その一方で、強い責任感を感じています。私はアメリカとドイツで音楽を学びましたので、そのような経験を音楽に落とし込み、作品を創っていきたくと思っています。

『魔笛』はベルリン・オペラ・アカデミーで副指揮者としてじっくりと向き合った作品。音符の一音一音にまで想いを込めて奏でたいと思います。

Ken Yanagisawa / 柳澤 謙(やなぎさわ・けん)
ボストン出身。現在、ボストン市民交響楽団(Boston Civic Symphony)の副指揮者。幼少時よりピアノ、サクソフォン、14歳よりオーボエを学ぶ。ジュリアード音楽院のプレカレッジ、ボストンのニューイングランド音楽院では指揮法とオーボエ奏法を学ぶ。イエール大学にて脳科学を専攻。京都市立芸術大学では研究生として下野竜也に師事し、指揮法について知見を深める。マンハッタン音楽大学指揮科を首席で卒業後、現在はボストン大学芸術学部音楽芸術博士課程に在籍。

演出家 高岸 未朝

オペラ演出家として大活躍の高岸未朝さんが、自身のキャリアの中で最も深く関わるオペラ『魔笛』を、関西二期会のために演出する。男性中心の社会を描くこのオペラを、女性ならではの目線で読み解く。

オペラ演出家を志したのはいつからですか

実はオペラ演出家になる、という強い意志があったわけではありません。芸術に造詣の深かった両親のもとで美術、バレエ、クラシック音楽、文学に囲まれて育ったからか、オペラは身近にある芸術でした。少し変わっているかもしれませんが、両親と詩を交換し合うような、そんな家庭環境でした。

初めて演出に携わったのは16歳の時でした。作品は、モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』。その頃よりオペラの専門家と関わるようになり、その面白さの虜となって専門性を深めていくようになりました。「オペラ演出家」という職業へは、自然に導かれたという感じがします。

オペラ『魔笛』にはどのような魅力があるとされますか

観る側、創る側として、多様に視点を変えることが出来る点に魅力があるのではないのでしょうか。男性的、女性的な見方、上演される時期によっても受け止め方が変わる作品です。ファンタジックな物語の裏に、モーツァルトも一員だったとされるフリーメーソンの教義が見え隠れする点も興味深いです。ヨーロッパで結成されたこの秘密結社の各グループが、互いの存在を確認できるよう、モーツァルトは秘密裏にメッセージを込めたのでしょう。

空想を無限大に広げられ、様々な表現の可能性を追求できるオペラである点にも惹かれます。

指揮者を務める柳澤さんは、本企画では差別的要素を排除したいと言われました。高岸さんのご意見をお聞かせください。

私も明確な差別要素は排除したいと思います。難しい問題ですが、作品によっては差別的な考えの上に物語が成り立っているということがあっても事実です。『魔笛』にも女性軽視などの考えが組み込まれています。しかし



ローバルな着眼点で捉え直して見ると、作品に込められた別の「本質」が見えてくるような気がします。

オペラには個性的なキャラクターが登場します。多彩な個性や物語を繋ぐものは何でしょうか。

それはオペラのタイトルロール『魔笛』、つまり音楽でしょう。音楽の要素でモーツァルトは全てを調和させています。喜びと悲しみの「落差」が大きいほど、物語というのはドラマティックになります。このオペラでは陰と陽、善と悪、男と女、光と闇など、二つの補い合うべき要素を登場させ、それを音楽によって繋いでいます。

オペラの最後は、試練に打ち勝ったタミーノとパパゲーノの各々のハッピーエンドで終演します。面白いのは前半では軽い存在として描かれていたパミーナ(女性)の存在を最後は認めているところです。そして混沌としたものから、秩序に向かっていく・・・これはモーツァルトが未来へと夢を託す様が描かれていると感じます。その点に作曲家の大いなる人間性を感じるのです。

高岸 未朝(たかぎし みさ) オペラ演出家、演技指導者。明治大学文学部演劇学専攻卒業。オペラ演出家として、これまでにモーツァルト『フィガロの結婚』、『ドン・ジョヴァンニ』、オッフェンバック『天国と地獄』、ドニゼッティ『愛の妙薬』などの演出を務めた。2004年には新国立劇場でマスカーニ『友人フリッツ』の演出を担当するなど、着々とそのキャリアを築いている。演技指導者としての一面も持ち、東京藝術大学および大学院オペラ科、国立音楽大学および大学院声楽専攻、相愛大学音楽学部声楽専攻などで指導を行っている。



歌劇 **魔笛**

振り返る 人生の軌跡

質問

タミーノは『沈黙』という試練を
乗り越えて愛を得ました。
皆さんは、今までに乗り越えた
大変な試練はありましたか？

ザラストロ役



片桐 直樹

試練と言えるかわかりませんが、今でも記憶に残る非常に過酷な一日という日が二回ありました。一つは、共通一次試験の日にピアノの発表会があった日。もう一つは、中学の教師をしていた時、文化祭実行委員長として午前中砂埃の中、グラウンドで全校生徒のフォークダンスを仕切った後、その足でワーグナーの楽劇の本番に駆け込んだという日です。



武久 竜也

大学時代の声楽の先生が大変厳しい方で、それまで奔放に過ごしていた自分には大きな「試練」となりました。音楽に取り組む姿勢から、社会での立ち振る舞い方まで叩き込まれました。当時は苦しい事も多かったのですが、それらの経験は大きな財産となり、今では感謝致しております。

弁者役



米田 哲二

眼前に立ちはだかる壁が試練であるなら、小さな試練を一つ一つ乗り越えていくことが目標達成に近づくのだと思います。私の音楽人生において幾多の試練を乗り越えてきたつもりですが、自分の描く理想の声で理想の音楽を表現するのは未だに難しく、今も新たな壁がそびえ立っています。



西尾 岳史

それこそ『魔笛』のパパゲーノ役でドイツ語の『暗譜』が大変だったこと。(セリフもドイツ語でしたので大変!!)刻々と稽古が近づく恐怖と闘いながら、真夜中に起きては、全幕を頭の中で唱えて、もう一度寝ていました…まさに試練でしたね(笑)

夜の女王役



四方 典子

私にとっての試練は…禁酒の試練です。お酒が大好きなので、いろんな本番前にこの試練が登場します(笑)私にとってはお酒は水みたいなものなので、我慢するが本当に試練です!でも、本番前は我慢できますね♪しかし…たまに…ちょっと飲んだりしますけど…(笑)



松浦 優

試練はたくさんありますが…1番は出産です!!とにかく出てきてもらわないと永遠に終わらない痛み…でも!!不思議と忘れるあの痛み(笑)今は思春期真っ只中の子育て…まだまだ試練は続きそうです…(汗)さて、魔笛でも母の役ですが…こちらは娘パミーナちゃんとの関係はいかに?!